帝都鳴動 I

三木原慧一
Keiichi Mikihara

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

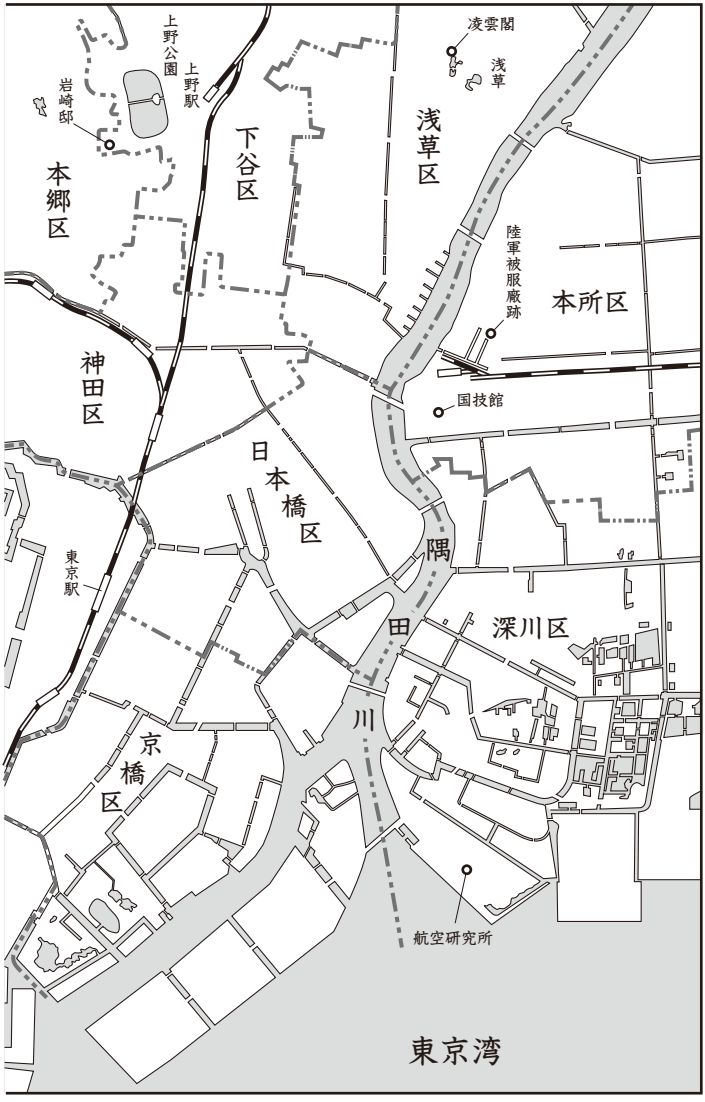
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

帝都鳴動Ⅰ　目次

プロローグ　過去への遡行　11
第一章　大正一二年三月　18
第二章　桜咲く　37
第三章　検討会　53
第四章　暗闘　79
第五章　新参者の奮戦　106
第六章　模擬戦闘　131
第七章　ニューヨーク・ディナー作戦　147

第八章　〝戦う水兵〟の面影　171
第九章　ノーバディズ・パーフェクト　186
第一〇章　ライオンとテンペスト　223
第一一章　怪しい中国人　251
第一二章　火災旋風シミュレーション　263
第一三章　狂詩曲　275
第一四章　カウントダウン　287
第一五章　帝都鳴動　316


上野公園
上野駅
岩崎邸
本郷区
下谷区
浅草区
凌雲閣
浅草
陸軍被服廠跡
本所区
神田区
国技館
日本橋区
東京駅
隅田川
深川区
京橋区
航空研究所
東京湾

東京市地図
（大正12年現在）

図版　安達裕章

帝都鳴動Ⅰ

プロローグ　過去への遡行

二〇一五年九月一九日、重要法案が成立した。平和安全法制整備法と国際平和支援法である。

いずれも日本と国際社会の平和、安全に寄与する法律であったが、法案は様々な問題を孕んでいた。

それらが表面化し、日本の安全が深刻な危機に陥るのに一〇年とかからなかった。

再び国論を真っ二つにする大論争を経た後、日本国民は憲法改正を選択、自衛隊は、自衛軍となった。厳格な交戦法規の下、国軍として交戦権を有する存在に生まれ変わったのである。

高野徹也、魚住惣司、榊航一、三名は、自衛軍幹部として少数精鋭の部下を率い、日本の運命を大きく変える重大事案にかかわった。

これは彼らの物語だ。

暗がりに無線交信音が飛び交っていた。符丁、座標、簡潔な報告。独自の抑揚、言い回し。

陸上自衛軍の戦闘交信だ。

次の瞬間、映像中継車両全体が揺れ始めた。五秒経ち、一〇秒となった。まだ続いている。

「地震か」

有田将彦二等陸曹は眉をひそめた。モニターと電子器材はフル稼働だ。液晶画面に、原発施設の全景、各所の様子が映っている。

「それにしては妙です、二曹」小鳥遊裕太三曹が応じる。「初期微動継続時間が長すぎますよ」
「状況を確認する。三カメをメインモニターだ」
部下が素早くスイッチを切り替える。
大型モニターに第三カメラの映像が出た。合図のように扉が開き、制服姿の幹部自衛官たちが姿を現す。
一人は海上自衛軍、もう一人は航空自衛軍だ。
海自幹部、魚住三佐がしかめ顔を向けた。「有田二曹、施設の動向をチェックしろ。この揺れは妙だ」
「単に震源が遠いのではありませんか」
有田が応じ、小鳥遊が後を引き取る。
「あるいは、逆に震源が近く、今感じている揺れが」
「本震だというのか」魚住は瞬く。
初期微動は、地震動の最初に訪れる小さな揺れだ。これをP波（縦波）と呼ぶ。次いで訪れる大きな揺れがS波（横波）。P波はS波より速いので到着に時間差が生じる。ただし、足下が震源地の場合、到達時間差はゼロに近くなる。
「だとしたら、細かい揺れがずいぶん長く続くな。普通、そういうのは短時間で収まるはずだ」
航空自衛軍空幹部、榊一尉は言った。「施設が心配だ。有田二曹、内部はどうなっている」
一部のモニターがブラックアウトしていた。有田はスイッチを切り替え、顔をしかめる。部下に声をかけ、予備回線を調べ、手元のスイッチを幾つか捻った。
「榊一尉、内部カメラは全て落ちています」
「はい。遠隔操作撮影ユニットのリンクが全て切れています」
「有田二曹、あれ！」
小鳥遊三曹の声に続き、車内に次々と男たちのうめき声が響く。
高速増殖炉『もんじゅ』の建屋が崩れていた。ドーム型天蓋の一角から黒煙が上がっている。
魚住は車内の一同に呼びかけた。「みんな、落ち

着け。榊、線量計の数値は」
「平常値だ。問題ない」
幹部の声を背に、有田も部下たちの掌握に務める。一段落付いたところで彼は振り向いた。「魚住三佐、撮影を続行します。よろしいですか」
「別命あるまで続行せよ」
命じつつ、魚住は心の中でつぶやく。今ごろ、これを見ている防衛省、首相官邸は大騒ぎだろう。もんじゅの防壁が内側から破壊された。あり得べからざる事態だ。
魚住の感想は控えめと言えた。
この日、二〇XX年三月一日。
大規模テロ攻撃を受けた日本は空前の大混乱に巻きこまれていた。
発端は、例の国の内紛だった。
世襲制社会主義を掲げるその小国は、初代国家首領、二代目、三代目と、一族が権力を握っている。
彼らの体制は、国際政治学者たちの崩壊予測を悉く退け、なおも続くかと思われた。
ところが、突如問題が生じた。
経験不足な新指導部に対し、軍の一部が反旗を翻したのだ。新指導部はこの鎮圧に失敗、彼の国は内乱状態に陥った。
一方、三八度線の南では、この機に乗じ例の国を打倒する計画が動いていた。アメリカはこれを食い止めるべく手を尽くしたが、祖国統一を悲願とする民族感情を止める術はない。
国家安全保障会議を召集したホワイトハウスは、対応策の検討に入った。そこへCIAから恐るべき情報がもたらされた。
「南の計画を阻止するべく、北は大規模テロ攻撃を準備中。標的は、南首都、半島各港湾都市、そして、日本」
「信じられない」

阿覧卓博士はつぶやいた。

放射性防護ヘルメットのバイザー越しに見る光景は卒倒しかねないものだった。

原子炉格納容器を密閉する最終エアロックは完全に破壊されていた。本来ならば厳重に閉ざされ、高度な安全監理下にあるもんじゅの中枢は今や戦場だ。ひしゃげた燃料交換装置が痛ましい。装置付近の螺旋階段に侵入者たちの遺体が散乱していた。

銃声が連続した。陸上自衛軍特殊部隊の突撃銃が唸りを上げる。彼らはフランジブル弾を使っていた。装置類に命中しても弾頭が砕け散り、破損を招かない。ハイジャックされた航空機の機内等で使われる、人体は貫くが器材を傷つけない特殊な弾丸だ。

日頃の研究生活がフィクションに思える光景に阿覧博士はめまいがした。奇異で不条理な暴力連鎖だ。

ほんの四時間前。

阿覧は東京都内の研究所にいた。例の国の内乱はニュースで見ていたが、他国の問題であった。

それが一転、爆音と共に陸自のヘリが舞い降り、もんじゅの危機を伝えた。

内閣官房が、例の国の特殊部隊に福井県敦賀市の高速増殖炉もんじゅが乗っ取られたと告げる。

もんじゅは、ウラン２３８とプルトニウムを燃料に、発電しながら使った分以上のプルトニウムを造る高速増殖炉だ。セキュリティレベルも高い。

『警備はどうしたのですか。精鋭が常駐しているはずだが』

『機動隊銃器対策部隊は、敵特殊部隊の攻撃により全滅しました。内閣は防衛出動命令を発し、陸上自衛軍対原発テロ特殊部隊が出撃準備中です。阿覧博士、もんじゅの専門家として、特殊部隊への同行を命じます』

陸上自衛軍対原発テロ特殊部隊〈プロメテウス〉は、かつてサミットへの核テロを未然に防ぎ、各国首脳と多数の人命を救った。先進各国特殊部隊の中

でも五指に入る実力と高い評価を得ている。
彼らと例の国の特殊部隊攻防戦は格納容器周辺に移っていた。グレネードランチャーが唸り、四〇ミリ榴弾（りゅうだん）が次々と爆発する。最終攻防戦が続く中、博士のヘルメットからは、部隊指揮官、高野一尉を始めとする隊員たちの無線音声が響き続けていた。
「敵を原子炉に近づけるな」
直径八・七メートル、高さ一七・八メートルのステンレス製容器がいわゆる原子炉格納容器。原子炉はその中にある。
阿覧は原子炉格納容器の数メートル手前にいた。レシーバーから『ＲＰＧ！』と響き、弾頭が爆発する。阿覧は爆風を受け、倒れた。その頭上を火線が通過する。ロシア製ＡＫＳ７４Ｕの斉射だ。
敵兵の姿がバイザー越しに見える。近づいて来た。最後を覚悟した博士は目を閉じる。発砲音と共に敵が倒れた。友軍の援護射撃だ。
原子炉に近づく敵を斉射で仕留めた高野一尉の頬は引き攣（つ）っていた。
敵は格納容器の窒素封入を解き、通常空気で満たした。ここで一次系ナトリウム配管が破損したら、格納容器の炎上は避けられない。ナトリウムは、空気、水分双方に発火性があるためだ。
「やらせはしない」
不意にＲＰＧの発射音が響いた。水平撃ちではない。上を狙ったのだ。弾頭が瞬時に天蓋部を直撃した。爆発と共に破片が次々と落下する。
凄まじい衝撃だった。
破片がヘルメットにぶち当たった。金属バットで頭部を殴りつけられたような打撃。痛みは感じない。圧倒的な痺（しび）れと耳鳴りだ。高野は思わず見上げ、絶句した。
透き通るような青空が広がっている。
蒼穹（そうきゅう）。それは災厄を意味する魔性の空。この瞬間、もんじゅの外部遮蔽・密閉機能は失われた。格納容

器内の原子炉が破壊されたら最後、空前の核汚染が日本列島に襲いかかる。

「高野一尉！」

自分を呼ぶ声だ。日本海から流れこむ潮風を得て白煙と火焔が勢いを増す。腕時計型ガイガーカウンターの数値は安全圏を示すが、今後は予断を許さない。

高野はひび割れたバイザーを外した。

背負い式エアタンクも外し、浅く息を吸う。

水酸化ナトリウムの刺激臭が、喉を、肺を刺激する。

それでも呼吸はできた。問題ない。やれる。

ナトリウムが立てる白煙越しに影が動く。識別は一瞬だ。高野はH&K416の引き金を絞る。ドイツ製カービンの銃弾を喰らった敵兵の後頭部から血と脳漿が飛び散った。

途端に左側頭部をはたかれたような衝撃が疾る。敵弾の衝撃波だ。

撃ち返しつつ、高野は目を細めた。

燃料交換装置に敵が取り付いていた。フルオートに切り替え、引き金を引く。命中ではなく、制圧効果を狙う。毎分八〇〇発で五・五六ミリNATO弾を浴びせつつ高野は進んだ。

至る所に防護服の部下たち、それに倍する敵兵たちが倒れている。

警報音が続き、ナトリウムが炎と煙を上げ、視野を閉ざしていく。

俺は負けぬ。いや。死なぬ。

「高野一尉！」

振り向く。阿覧博士だった。幽鬼のような表情で指さす先に人影が浮かぶ。

ナップザックを背負う筋骨たくましい男のシルエット。それが炉心の真上にあった。男は転落防止用の鉄鎖を乗り越えた。原子炉容器めがけ、飛び降りるつもりだ。高野はH&K416を構え、フルオートで男に叩きこむ。血煙が噴き上がった。

「万歳（マンセー）！」

遅かった。絶叫を残し、男は墜落した。

次の瞬間、原子炉格納庫は凄まじい輝きに包まれた。

光の渦に、阿覧博士が、高野の姿が融（と）けていく。

高速増殖原型炉もんじゅは爆発した。

原子炉格納容器が粉砕され、青白い光が付近一帯に広がっていく。

高野、榊、魚住以下の戦いは終わった。

終わったかに見えた。

そう。終焉（しゅうえん）を迎えたその瞬間、彼らは時空を超えてタイムスリップしたのだ。

その年代と到着先はm。

第一章　大正一二年三月

澄み切った空気の境内。
月明かりがほのかに周囲を照らす。
神霊が鎮まる聖地に相応しい静謐。
不意にそれが破られた。
微かなうめきと共に男たちが身をよじる。
陸海空三自衛軍の軍服を纏った二〇名ばかりの姿。
彼らは次々と目覚め、茫然と周囲を見回し、同僚の安否を問い、未だ倒れる仲間を揺さぶり、起こす。
やがて彼らは規律を取り戻した。一人の男の前に集まる。
「なにが、どうなったのです、隊長」
部下の声に、高野徹也一等陸尉は即答できずにいた。自分でも、何が起きたのか判らないのだ。
何より、生きているのが奇跡だ。
自分は確かにもんじゅの爆発を目撃した。
青白い光に包まれ、凄まじい衝撃を覚えた。その先の記憶はない。暗黒の中に落ちていった。
意識を取り戻した時、最初に見たものは、淡い月の光に浮かぶ鳥居の額束だった。見覚えがあった。
立ち上がった高野は、そこがもんじゅの対岸にある白城神社境内と悟る。任務上、原発周辺の地理は詳しく把握している。該当するのは、社の前にある小さな鳥居だ。
とはいえ、なぜこうなったのか。肝心なところは

不明なままだ。

「普通なら、どう考えようと死んでいますね」阿覧卓博士の声が一同の想いを集約していた。

そう。高速増殖炉の爆発に、人体が耐えうるはずがない。俺たちは死んだはずだ。

顔を見合わせる一同に「だったら、ここはあの世か。変じゃないか。俺は一応、カトリックなんだぜ」乾いた声を発したのは航空自衛軍の榊航一一等空尉だった。

それを合図に部下たちが一斉にしゃべり出す。

「静まれ」高野は落ち着いた口調で達し、軽く深呼吸をした。

まずは、状況把握だ。

集合をかけ、人数を確認する。僅かな月明かりの下、隊員たちは整然と整列した。点呼が響く。陸海空、三自衛軍、三曹から三佐まで二二名、阿覧博士を入れて二三名と出た。

「配置場所の相関性はなさそうだな」そう指摘したのは、海上自衛軍魚住惣司三等海佐だ。

榊一尉もうなずく。「そうだな。あの時、俺たちは映像中継車両の中にいた。それが今は、この有様だ。問題は」

「実況員の有田二曹たちの姿が見えないな」と、魚住。

「車両ごと消えたとしか考えられまい。さらに、もんじゅ周辺には、八〇〇名を越す人員が展開していた。それが今は、たったの二三名だぜ」

榊の声に高野は顔をしかめた。

「だれか、この現象を説明できる者はいるか」

十数秒の沈黙が答えとなった。月明かりに白衣は目立つ。高野はやや離れた場所に立つ医官に声をかけた。

「加羽沢三佐はいかがです」

中肉中背、銀縁眼鏡の加羽沢寛雄三等陸佐が静かに応じた。「現象自体は、私にも判りません。ただ、周辺の放射線値を調べる限り、正常です。東京の平

均値よりむしろ低いくらいだ」
三佐は被曝医療に精通する医官である。高野は納得した。
「あなたが言うなら確かでしょう。ところで三佐の階級は魚住と同じですが」
「判っています。彼が先任、私はその指揮に従います」
加羽沢三佐は配属から間がなく、指揮関連教育はこれからであった。指揮継承順位で揉める要素はなさそうだ。
魚住は思案の表情だった。「誰にも納得のいく説明は難しいか。二人とも、ここからどうする」
同期二人に尋ねる魚住に榊が応じた。
「その前に、魚住、時計はどうなっている。俺のはこうだ」
榊はG-SHOCKのボタンを押し、年月日を出した。
「まるで無茶苦茶じゃないか」魚住が言った。
「そうだ。さっきもやってみたんだが、今が西暦何年かすら判らん。こんな事があるのか」
「年月日なら判りますよ」
魚住たちは振り向いた。阿覧博士が何かを手に歩いてくる。近づいた博士は無造作に伝えた。
「これはタイムスリップです」
「タイムスリップ」と魚住。
博士が新聞を差し出す。讀賣新聞だ。
「郵便受けに収まっていました。日付を御覧なさい」
高野たちは目を凝らすが、さすがにこの月明かりでは無理だ。魚住がLED懐中電灯をつける。照度を最少に絞ってもはっきり見えた。
「大正一二年三月一一日」
高野が読み上げ、榊が割りこんだ。
「西暦換算で言うと何年だ」
「一九二三年です」横から松園征二等陸尉が答えた。彼はプロメテウスの中で経理を担当する初級幹

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。